

商店も、自動車化に対応するためには、都心の土地を売って郊外に敷地を拡大し、駐車場を持った大型商店に変わるものが多かった。

高い税金と自動車化の浸透は、都心の住民に転居を迫るが、それに加えて、不動産業の都心部での土地買いも無視できない。高地価の都心部は、不動産業者の格好の市場である。不動産業たちは都心部の地主たちに、土地の売却を根気よく迫るという。不動産業者は大きな面積がまとまるまで、土地買いを続ける。それに年月がかかろうと、買い上げた小さな区画の地価は決して下落することがなく、むしろ、放置しておくだけでもその価値

は高まる。また、不動産業者の手にわたった土地を有料駐車場として活用することもある。彼らが首尾よく大きな区画の土地を自らのものにしたとき、そのような高価な土地を購入できる業種は限定されてくる。ある地理学者の計算によると、一定面積から最も収益をあげるのは、金融機関であるという言葉が頭にうかんできた。また、このような都心化が進むと、住民組織の一つである町内会の活動も困難になり、地域的な共同体意識はますます薄らいでいる、とS氏が述べた言葉は印象的であった。

(筑波大学)

オランダのクリスマスツリー

中 島 直 子

成田空港から17時間、ヨーロッパの空の玄関オランダのスキポール空港へ到着した。時刻は午前8時頃だったが、まだ薄暗かった。沖合へと繰り返し行われた干拓事業によって国土を着実にふやしてきたオランダでは、空港も標高-20mの干拓地に立地していた。空港面積1,750ha、現在の成田空港の3倍以上の広さであるばかりか、将来の空港拡張のための用地も確保されているようだ。6本の滑走路をもつ空港のなかには、500haの営農地のほかに植林によるブナ・ポプラ・ヤナギ等の森林が帯状にできあがっていた。跳ね橋のかけられた水路が滑走路面より高いところにあるのを見なければ、スキポール(「船の難破する浅瀬」のオランダ語らしい)の意味やここが昔海底であったことに気づかなかっただろう。

首都アムステルダム空港間は15km、車で15分余の距離である。とても便利な国際空港だな、と考えながら都心へ向う途中、郊外の中高層集合住宅のそばを通った。クリスマスから4、5日たっているのに、日本では、にぎやかなクリスマスセールが終了した後に松飾りが付けられた頃である。しかし、ここではアパートのどの窓も白いレースのカーテンが左右に開かれ、窓をとおして豆電球が輝く小さなクリスマスツリーが静かに飾られているのが眺められた。この時期の日の出は9時頃、用水路も凍結する暗く寒い北緯53度に位置するアムステルダム郊外の集合住宅の開口部が、北海道の住宅の窓より、また東京のマンションのそれよりずっと大きく開放的に設計されているのに驚いた。また大きな窓をとおしてオランダ人の落ちついた住生活の一場面を垣間見た思いがし

た。こじんまりと飾られた窓辺は、一戸建住居においても勿論のことであり、街路に住居内のくつろいだ雰囲気伝えていた。

日本では洗濯物や布団がベランダに並べられることが多いだろうし、干物がいない場合には住居内が見えにくいように、保温効果がよいようにカーテンは閉じられることが多いだろう。色々な飾りをつけたクリスマスツリーは商売用や子供のために飾られることはあっても、クリスマスが過ぎればすぐに片づけられ、オランダやベルギーのように1月15日まで美しく置かれることはほとんどないだろう。ツリーはクリスマスと新年を迎えようとする人々の神聖な気持ちの印であり、西洋と東洋の差はあっても、日本人が門松や注連飾りを戸口に付けるのと共通のものと思われた。ツリーも門松も常緑針葉樹であり、特に戸口の左右に飾られたツリーは外見的にも松飾りと類似していた。

オランダの住居の窓辺が出窓になっている場合には、和風住宅の床の間に少し似たところもある。陶器やポインセチア・クリスマスツリーなどの鉢物が並べられているからである。しかし床の間に奥の間という住居内の接客空間に作られ、その家の客人のために置物や生花が飾られるのに対して、オランダの窓辺は内部空間にありながら、外部空間からの視線を配慮した空間である。この点において両者は異なっている。

住宅の窓辺やベランダを、あるいは住宅地の前庭にあたる空間を家族だけの閉鎖的な空間とするか、または外部空間と連続させるかによって、都市景観・都市生活は

ずいぶん異なるものになるだろう。住居内部と外部に対する空間領域の連続性は、過密なわが国の都市生活だからこそ是非実現させたい。また実行したいものである。

日本は一応物の豊かな国になったが、長期的視点をもった土地（国土）利用計画や住生活・生活環境の分野で

は海外に学ぶ点が沢山あると思われる。次の機会には家族の住生活・社会生活のあり方を、またどのような条件のもとで外部空間を配慮することが可能となるのかを、住居内にはいつて調査してみたいと考えている。

（群馬女子大学）

還 暦 前 後

濱 英 彦

東京で小学校6年、中学校（旧制）5年プラス浪人1年を過ぎて、高等学校（旧制）の3年間は松本でアルプスを眺めて暮し、東京へ戻って大学3年間を終えると直ちに人口問題研究所（厚生省）へ勤めて31年が過ぎ、そのあと成城大学へ移って4年が経過しようとしている。かくして本年還暦に達する人生60年の生活も数行にしてつくる。この間にももちろん戦争の大事があり、思い起すことも多いが、今ここに至って一番に印象的なことは国立研究所と私立大学とでの生活のちがいである。前者は中央官庁の付属機関として組織的なタテ割り社会を基本とし、後者は私立大学として個性的なヨコ並び社会の典型だと感じている。対照的な2つの職場をみずから渡ってみて、いずれの生活も自分自身のわがままを基準としてみて一長一短、まことに興味深い。具体的なことはどちらからもお叱りを受けるので、口のなかでつぶやくにとどまるが、それにしてもなぜ大学へ移ったのかと人にきかれ、みずからにも問い、その公式的な回答は研究の原点にもう一度帰りたいなどと恰好のよいことを一応は云ってみるが、ほんとうのところはあの長い長い夏休みが何とも欲しいという即物的な願望が一番先にあった。しかしいざ手に入れてみると、その夏休みがさっぱり生きないのは、やはり次元の低い願望のせい、または夏休み体験不足のせい、とはいえない。いまや大学へ移って4年が過ぎ、生活切換えのごときモラトリアム期間も終り、かつ還暦にふさわしく何ごとかを再出発させたい、

させるべきだと寝ころがっては思いを馳せる。

ところがかつて人生50年、実際には男子46歳、女子49歳の戦前時代には60歳はすでにプラス10年以上を経過し、めでたきよわいがあったかもしれないが、いまや人生80年の時代ともなれば、このあとまだ20年を残すということであって、とてもめでたいなどと云ってはいられない。ただし生命表をみると、1985年に男子60歳が20年後——それはもう21世紀だ——の80歳までに生きる生存確率ともなれば、およそ46%、半数を切るなのであって、これはいささか気を悪くするデータである。そういう20年をにらんでの再出発は1年1年を積みあげる心がけが大事というべきだが、ほんとうのところ年をとると体力・気力・知力・経済力などすべてにわたって個人差が大きくなるのであって、平均値的な発想や対応はあまり有効でない。もっとも研究者稼業・経済力に関するかぎり青年期から低水準のままであるが、困ることは思考の源泉となる気力・知力といったものがこれからどの程度に落ちてゆくものか見過せないことだ。近ごろ家のなかで何か用があって別の部屋へゆき、何の用か思い出せないことがふえ、少し年上の先生にそのお話をしたところ、そんなことはしょっちゅうありますよという御返事で大いに意を強うしたが（?）、ともあれ還暦からの再出発とあれば、このようなおどろおどろしき気配には素知らぬ顔をして、まずは再びあくなき好奇心を内側に燃やして前進のエネルギーとすることが肝心と私自身思い込んでいる。

（成城大学）

地球システムの立場からみた地学

浜 田 隆 士

学問の進展が専門分野の分化と深化とに支えられ、今日の近代科学隆盛を生むに至ったことは、否定仕様のな

い現実であり、歴史的経過である。ところが昨今、総合の時代、量から質への転換期、などと唱えられ始めてい